

医療ルネサンス

No5780



股関節脱臼

1 / 5

乳幼児健診 見過ごし増加

「なんだか歩き方がおかしいみたい」

長野県山形村の柴田佐知子さん(37)は、1歳2か月で歩き始めた次女、心愛ちゃん(2)の様子を見て不安になった。「まだ小さいから筋力が弱いだけ」。そんな周囲の声に自分を納得させていたころ、通い始めた保育園で保育士に尋ねられた。「心愛ちゃん、脚どうかしたの?」

それをきっかけに、信濃医療福祉センター(同県下諏訪町)で小児整形外科医の診察を受けた。「先天性股関節脱臼です。赤ちゃんの時にわかれば治りやすかったのですが、今からだと治療に難渋するかもしれない」。昨年5月、1歳5か月の時だった。

大腿骨の上端が骨盤のくぼみ(臼蓋)にはまって形成される股関節。先天性股関節脱臼は、大腿骨が臼



蓋から外れる病気で、生まれ持った要因と出生後の環境が重なって起きると考えられている。生まれた時に異常がなくても、おむつや衣服の締め付け、抱き方などにより、後になって外れることもある。

腰から脚にかけてギプスで固定されていた時の心愛ちゃん。母の佐知子さんは「もっと早く見つかってれば」と話す。

心愛ちゃんは、ベッドに横になり右脚に重りを付けるなどして引っ張る「牽引療法」を2週間受け、筋肉を柔らかくして大腿骨の位置を治しやすくしてから、関節をはめて腰と脚をギプ

スで固定した。股関節が安定するには時間がかかり、ギプスが取れたのは昨年12月。今年1年間は装具をつけて過ごす予定だ。

柴田さんは「動き回りがくて仕方がない時期。ギプスをしていた時はお風呂にも入れなかったし、ストレスのせいか夜泣きが増えた。

小さい子にはどんなにつらいことか。もっと早くわかっていれば」と嘆く。

先天性股関節脱臼は、日本では1970年ごろまで100人に1人くらいの割合で見られたが、予防啓発が進み、今では1000人に1〜3人程度。ところが、それに伴い、この病気をよく知る医師が減って乳幼児健診で見つかりにくくなり、歩き始めてようやく診断される子が増えてきた。

日本小児整形外科学会が今月末とめた全国調査の結果によると、2011〜12年度に診断された子どもの6人に1人が1歳以降の診断で、ほとんどが乳幼児健診を受けていたの見過ごされていた。

同センター所長の朝貝芳美さんは「生後3、4か月なら多くは通院で治せるが、1歳過ぎまで診断が遅れると入院治療や手術が必要になる子も増える。健診で問題を見逃さないことが大切だ」と訴える。

(このシリーズは全5回)

医療ルネサンス

No5781



股関節脱臼

2 / 5

「過去の病気」誤った認識

先天性股関節脱臼の治療は、1歳過ぎまで診断が遅れると、赤ちゃんの時に見つかる場合に比べ格段に難しくなる。股関節が外れたまま成長が進むので、年を重ねるほど骨がはまりにくくなってしまふ。

「診断された時はもう4歳になっていて、手術が必要でした。治療には、丸半年かかりました」

愛知県蟹江町の梨本裕美子さん(44)は、我が子の闘病体験を振り返る。長女の果菜流ちゃん(7)が右の股関節脱臼と診断されたのは2011年4月のことだった。

「1歳の時の映像を見ても、今なら歩き方がおかしいのがわかる。でも、健診で異常ないと言われていたし、当時は気づきませんでした」と梨本さん。ただ、成長とともに心配になってきた。右脚がやや下がる歩



き方、右脚でケンケンがでないこと、右脚が左より細いこと……。気になることがいくつもあった。

「歩き方がおかしいんですが、大丈夫でしょうか」。3歳児健診の時、診察した小児科医に相談した。「走れますか?」と尋ねられたので、「足は速いんです」と答えると、「それなら大丈夫でしょう」と言われて終わった。その後、知人のついでで受診した整形外科で、ようやく診断がついた。

半年以上の治療生活を経て、今では縄跳びも上手になった果菜流ちゃん

「できるだけ早く手術したほうがいい」。主治医となった、あいち小児保健医療総合センター(同県大府市)の服部義さんは、即入院を求めた。

入院すると、2週間後の手術に備え、右脚の牽引を行った。果菜流ちゃんは、脱臼した大腿骨の上端が本来の位置より2センチにずれていた。牽引は、ベッドに

横になって脚を重りで引っ張るもので、脱臼している骨を無理なく戻せるよう、あらかじめ筋肉や神経を伸ばしておくための処置だ。

手術では、大腿骨の位置を治すと同時に、それをはめ込む骨盤のくぼみ(臼蓋)を切って形を整えた。長期間脱臼したままだったので、臼蓋の発育が悪くて大腿骨がうまくはまりきらず、大人になってから、強い痛みや症状がある「変形性股関節症」になる恐れがあったためだ。

現在、半年に1度通院して経過観察を続け、順調に回復している果菜流ちゃんは「右脚でケンケンできるし、縄跳びも得意」と、活発さを取り戻した。

服部さんは「3歳以上で診断されるとほとんど手術になるが、生後3か月くらいでわかっていけば通院で治療でき、手術しなくて済んだ可能性が高い。『過去の病気』という風潮を改め、早期発見を徹底しなければいけない」と話す。



先天性股関節脱臼は、生後6か月までの早期に診断できれば8割以上が通院治療で治せる。治療には、リメンビュージェルという器具を使うのが一般的だ。

神戸市の福山絆生ちゃん(1)は3か月健診をきっかけに左股関節の脱臼がわかり、この治療を受けた。

健診をした小児科医は、左脚が開きにくいことに気づいたが、「大丈夫だと思っただけ……」と半信半疑だった。しかし、母親の直子さん(26)が不安を口にすると、整形外科医に紹介状を書いてくれた。兵庫県立こども病院で、エックス線検査により脱臼が確認され、3か月間のリメンビュージェル療法をすることになった。

この治療は、柔らかいバンドでできた装具を赤ちゃんの胴と両脚に着け、両膝を曲げて脚をM字形に開いた姿勢(カエルの脚のような格好)を常時保つことで、

## 早期診断 装具で治療

脱臼した股関節をはめる。おおむね3か月程度、入院の時以外は着け、脚を伸ばした脱臼しやすい姿勢にならないようにする。

同病院のデータでは、リメンビュージェル療法で股関節をはめることができた患者は82%。ただ、この治療で大腿骨の上端に壊死が起きた例も、軽症を含め8%ほどあった。中には成長が終わっても変形が残ることがあり、注意が必要だ。

同病院整形外科の薩摩真一さんは「昔より患者が減ったことで、今はこの装具になじみのない医師もいる。着け方を間違えると効果がなく、かえって脱臼が重症化することもある。治療の際は、小児病院の整形外科など、症例をたくさん扱っている病院を受診してほしい」とアドバイスする。

絆生ちゃんは、この治療で、外れていた大腿骨の上

端は骨盤のくぼみ(臼蓋)にうまくはまり、今は股関節の成長が順調に進むかどうか経過観察中だ。臼蓋の発育が悪いなどの問題があれば5歳前後で手術が必要だが、多くは成長とともに自然に改善するという。

直子さんは「最初は、寝かせ方や抱き方が悪かったかと自分を責めて泣きました。でも、早い時期に治療できてよかった」と話す。

先天性股関節脱臼は、生まれつきの素

因とその後環境要因が重なって起こるとされる。生まれた時は異常がなく、後の生活の中で脱臼する場合もあり、日常生活上の注意によって予防できることもある。

予防策としては、①おむつや衣服で足を締め付け過ぎない②だっこは脚をM字に開いて正面から抱く③コアラだっこ④同じ方向ばかり向く⑤向き癖があれば、時々別の方向を向かせる――などがある。



絆生ちゃんは、脱臼が早い時期に見つかり、順調に回復している

医療ルネサンス

No.5783



股関節脱臼

4 / 5

項目チエック診断早く

千葉県の松戸市立病院。火曜と水曜の整形外科外来には、市内の小児科などで行われる乳児健診で、先天性股関節脱臼が疑われた赤ちゃんが、品田良之さんの診察を受けに来る。

先天性股関節脱臼は、患者の激減で病気をよく知る医師も減り、健診で見つからずに診断が1歳以降まで遅れ、治療が難航する例が増えている。

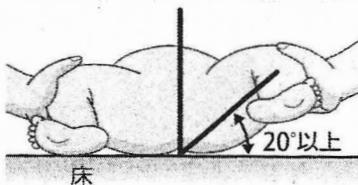
そうした中、同市は2003年から、脚の開き具合



健診で股関節脱臼の疑いが指摘され、品田さん(右)の超音波検査を受けるいみヒュリアちゃん

先天性股関節脱臼の心配がある赤ちゃんのチェックリスト

- ① 寝かせた状態で両脚をM字に開いた時、十分に開かない(膝が床から20°以上離れる)



- ② 太ももや股のしわが左右対称でない
- ③ 家族に股関節の悪い人がいる
- ④ 女の子
- ⑤ 逆子で生まれた

※①に当てはまるか、②～⑤の2項目以上に当てはまれば詳しい検査が勧められる

など、股関節脱臼を見つかる6つのチェック項目を乳児健診の受診票に盛り込んだ。各項目は点数化されており、健診を担当する小児科医がチェック。合計点が2点以上なら整形外科医に紹介し、エックス線と超音波で詳しく検査してもらう仕組みで、早く異常を見つ

けるのが目的だ。「この方式が定着し、ここ2年間は、診断が遅れた子は出ていま

せん」と品田さん。

今年2月下旬、診察を受けに来た伏原亜妃ちゃん(生後4か月の女兒)。健診で両脚が開きにくいとわかり、2歳の姉も右股関節に脱臼のおそれがあるとして通院していることなどから、4点と判定された。詳しく検査した結果は、異常なし。「ほっとしました」。母親の江里子さん(39)は胸をなで下ろした。

健診で2点だった3か月の女兒、堀田いみヒュリアちゃんは検査の結果、股関節の発育が悪く、脱臼しや

すいとみられた。そこで、柔らかいバンドを胴と脚に着け、両脚をM字に開いた姿勢を保つ「リーメンビュゲル」という装置を使って治療することになった。

母親のひとみさん(28)は「もうすぐ夫の国のトルコに帰る。将来が心配なだけに、早くわかってよかった」と話した。

同市のほか、長野県下諏訪町では、生後2、3か月の赤ちゃんを対象に超音波検査を実施し、異常が見られればエックス線検査で確定診断する取り組みが続いている。エックス線の被曝を最小限に抑えられるメリットがあるが、確実に行うには医師が超音波画像の判読に習熟する必要がある。

専門家が昨年秋、松戸方式を参考に、専門外の医師でも判断しやすい早期発見のチェックリスト「イラスト」を作った。日本小児整形外科学会は、全国の乳児健診で導入するよう呼びかけている。

医療ルネサンス

No.5784



股関節脱臼

5 / 5

高齢でも手術で改善

「あと何年生きられるかわからないけど、たとえわずかでも普通の女性として生きてみたかった。それが実現してうれしい」

昨年12月、右の股関節脱臼を手術で治した東京都八王子市の吉井たまえさん(78)は喜びを語る。

日本では1970年ごろまで、先天性股関節脱臼が多発していた。その後、健診の充実や予防啓発の普

及で患者は激減したが、適切な治療を受けないまま、加齢とともに痛みなどの不調を訴えるシニア世代もいる。吉井さんもその一人だ。

小さい時から、右脚が少し下がるような歩き方を気にしていた吉井さん。「私はどうしてこうなの?」。母に尋ねても、「生まれつきだから」と言われるだけ。20歳の時、初めて整形外科

医の診察を受け、先天性股関節脱臼だと知った。「今から治すのは難しい」と告げられ治療はあきらめたが、病名がわかって気持ちの整理がついた。

脚は少し不自由だったが、間もなく結婚して2人の息子に恵まれた。右脚が左より3センチほど短いので、パンツの丈を詰めたり、靴のヒールを継ぎ足したりする不便さはあっても、平穩に暮らしてきた。

退院の日、病院を出た吉井さんは、まっすぐ衣料品店へ。新しいパンツを身に着けて店を出ると、喜びがこみ上げてきた。「裾を切らずに既製服が着られる。涙が出るほどうれしかったのを忘れません」

吉井さんは手術後、股関節の痛みも消え、現在は筋力をつけるためのリハビリに励んでいる。1年ほどすれば、問題なく歩けるようになる見込みだ。



リハビリも兼ねて散歩する吉井さん。自宅でも毎日、片足立ちなどのリハビリを欠かさない

2、3年前から痛みを感じるようになり、知人の紹介で慈恵医大第三病院(同狛江市)整形外科を訪ねた。診察した大谷卓也さんは、人工股関節を付ける手術を提案した。

吉井さんが受けた手術は、右大腿骨の上端(骨頭)に人工骨頭を取り付け、上にずれていた骨を戻し、骨盤のくぼみ(臼蓋)の位置に取り付けた人工臼蓋に

大谷さんは「子どもの時に十分な治療ができず年を重ねても、治療技術が進歩した今、よくなる方法はあるので、あきらめないでほしい」と話している。

(高梨ゆき子) (次は「被災者を支える」)